

軽トラであなたの地域へ！ 飛矢崎雅也が暮らしの不安や ご意見に答えます！



Q JR小海線はこれからも存続するの？
(Aさん、大泉町、40歳代)



A いいえ。乗降客が減少している路線についての国土交通省やJRの表明によれば、小海線は存続の危機を迎えています。乗降客を増やす努力と並んで、小海線の「ファン」を増やすことが重要です。たとえば、沿線自治体・地域住民が協力して特産物をつくり、その販売によって各地から得た資金で小海線の運行を維持することなどを提言します。沿線自治体や住民と協力して、小海線の存続を求めていきます。

Q 大企業による地下水の独占利用は不公平では？
水資源の枯渇も心配
(Bさん、白州町、40歳代)



A はい。水循環基本法では「水は国民共有の財産」と定められています。山梨県は県民の共有財産である地下水資源を保全するために、例年水源涵養事業に多額の財政負担を行っています。ミネラルウォーター事業者は水源地の土地を買い入れ、採取した水そのものを販売して利益を得ているのですから、負担を求めるのは適当です。

過剰取水も気になります。現に白州町では井戸が汚濁・枯渇する問題が発生し、企業の水利用の影響ではないかと懸念されています。短期間には回復しない地下水は地下水涵養量以上に使えば枯渇してしまう有限の水資源であることを忘れてはなりません。地下水を守り長期的に利用するため、「安定的な水資源と健全な水循環の確保条例」を作り、水は公共のものという観点から地下水を管理し、公平な経済的便益がもたらされる制度を確立します。

Q 子どもたちに安全・安心な給食を食べさせたい！
(Dさん、長坂町、20歳代)



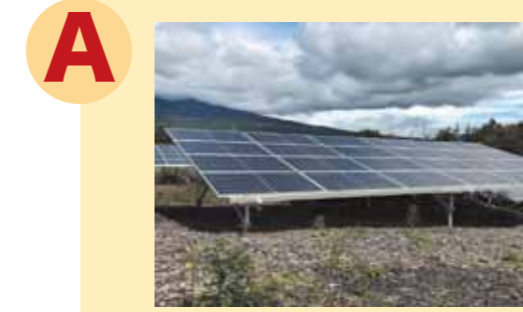
A はい。給食は、子どもたちみんなの大切な「食事」です。有機米・有機小麦・有機野菜を地元で調達できるよう地元農家と提携し、給食に提供できる仕組みを整えます。有機農作物への切り替えによる給食費の増額分は、県の一般会計で補填します。

Q “自動車の一台もない街”が日本に一つぐらいあったらなあとお夢しています。そのような街づくりは不可能なものでしょうか？
(Sさん、長坂町、80歳代)



A いいえ。可能だと思います。たとえば、長野県・妻籠宿は自動車の乗り入れを規制しています。それが街としての価値を上げて、事実近年は外国人観光客が急増しています。忙しい現代社会だからこそ、そういう日常から自由になりたいと思っている人は少なくないと思います。“自動車の一台もない街づくり”は、そんな要求にこたえられる“可能な街づくり”なのではないでしょうか。

Q 家の前に太陽光パネルの建設計画があり、とても心配です・・・
(Cさん、小淵沢町、30歳代)



A 再生可能エネルギーであっても、地域住民の理解と環境配慮、そして発電エネルギーとその利益を地域に循環させることが必要です。「山梨県太陽光発電施設の適正な設置及び維持管理に関する条例」の運用をしっかり監視し、必要とあれば見直します。

また太陽光発電設備の周辺地域の防災や生活環境、自然環境を守るための費用に充てるため、「事業用の太陽光発電パネルに課税する条例」を制定し、事業者の一部負担を求めます。

Q 飛矢崎さんの趣味や息抜き、
リラックスの過ごし方は？
(Gさん、武川町、50歳代)

A 旅です。旅に出て、日常とは違う時間を過ごす中でリフレッシュします。若い頃はバックパッカーとして主にアジアを旅していました。現在は、家族と一緒に自然や文化財のある場所を好んで旅しています。リラックスの過ごし方は、散歩や芸術鑑賞ですね。絵画、演劇、音楽などをよく鑑賞します。私にとって、芸術は“生の刺激剤”です（笑）。



大質問討論会

10月2日、ひやざき雅也「大質問討論会」へのお誘いを受けて、生れて初めてこういう集会に参加しました。

いままで、政治家を応援するというのはつまり、「〇〇先生に付いて、そのおこぼれで甘い汁を吸いたい」ということのように思っていました。が、飛矢崎さんを応援する方々のお気持ちはまったく違うものでした。

後援会長さんの冒頭のご挨拶「この後援会はひやざき雅也の政治理念、政策を支持して活動する会であり、義理人情で動く会ではありません。」というお言葉から分かったとおり、損得勘定でも好き嫌いでもない、筋の通った「理念・政策」がひやざき支持へと駆り立てている。そういう人たちの集まりという印象を持ちました。

支援するみなさんの発言や、壁に貼られた手書きのポスターなどから共通して感じられるのは、今のままの政治では、地方が、国が危ない、という「危機感」の強さです。旧態依然の県政を正すことはもとより、安倍政権以降顕著になった、平和安全保障について、教育について、経済について、外交についての国の失政を取り返すこと。そのメッセージを山梨県から中央へきちんと伝えること。それができるのが「自立した地方自治」であるということ。いかにパイプを太くして中央からのおこぼれを増やすか



という利権政治からは脱却すべきだということ。

それをやってもらうには、飛矢崎さんに活躍してもらえないという切迫した空気が、質疑応答や、テーブルごとの意見発表などから、ピンピンと伝わってきました。

最後の、飛矢崎さんの決意表明も、「このままではいけない」という本気度を感じられる、心動かされるものでした。あとは、その「理念」を私たちがどうやって周囲に広げていくかが課題ですね。飛矢崎さんにはぜひ頑張ってください、自分も伝えていきたいです。

(参加者の声)